

人文会 ニュース

業務用

〈座談会〉

人文書を創る側から	東京創元社	秋山孝男	
	有斐閣	沢部英一	
	未来社	松本昌次	
	晶文社	島崎 勉	
	朝日出版	中野幹隆	
	司会	小林一博.....	1
専門書ブック・フェアを考える	日販書籍調整課長	金子 栄.....	15
80年人文社会科学書20,000点フェア	東販名古屋支社	熊沢縣吾.....	17
人文書担当者名簿			20

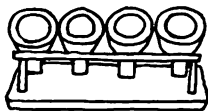
'81. 4

30

岩淵東洋男著

わたしの音響史

効果マンの記録



B 6 判・2200円

森繁久彌・評

人が歩けば靴の音、

馬が走れば蹄の響き、

ラジオでもテレビでも何の不思議もなく
聞き流す音の世界、それが当り前だ。

だがその当り前の蔭に

音作りの苦勞が展開する。

長いつき合ひの岩淵君の歴史の披露だ。

社会思想社

東京都文京区本郷 1-25-21・電話03-813-8101

未来文明の原点——新しい技術思想を求めて——

星野芳郎 巨大開発が自然保護か、相対する二つの技術思想
を批判検討し、技術史的に21世紀を予測する 二〇〇〇円 300

民科と私——戦後一科学者の歩み——

柘植秀臣 戦後、良心的な活動を続けた総合的科学家団体・
民主主義科学者協会の栄光と苦難の歴史。 三〇〇〇円 300

経験と哲学

熊谷直男 事物に接する我々の経験を現象学的に記述し、
験の階層構造と統合の視点を明確にする。 五〇〇〇円 300

ハーバマスの社会科学論

山本啓 科学論 労働論 システム論批判等からフランクフ
ルト学派の旗手ハーバマスの全体像に迫る。 二二〇〇円 250

東京文京
後楽2-23

勁草書房

振替東京
5-175253

有斐閣選書

中学生の心理

詫摩武俊・安香 宏編 ●両親と先生の心配に答える
個性化が進むと同時に不安と期待の内におとなの
世界へ歩みはじめる子ども達の姿を鮮やかに描く。

1300円

精神分析を学ぶ

前田重治・小川捷之編 ●病める心の深層を解明
人の心の中にある無意識の世界の解明に挑戦する
精神分析の考え方を豊富な事例を駆使して紹介。

1700円

権力の構造

秋元律郎著 ●現代を支配するもの「権力」はいま少
数のエリートに独占されているのか。それとも拡
散しているのか。「権力」のメカニズムを解明。

1600円

有斐閣／東京神田神保町2-17

古典文庫

八軒長屋

村上浪六著 1800円
明治末期東京庶民群像の衰微を
綴る村上浪六の傑作風俗小説

塵塚談・俗事百工起源

小川順道／宮川政運著 1600円
江戸市井見聞談と庶民生活文化
の起源を綴る文化年間の評判作

浦島子伝

重松明久著 1800円
群書類本など、諸浦島伝を流
塵な古代漢訓によって開示する

最暗黒の東京

松原岩五郎著 1200円
日本資本主義初期の貧民街探訪
記。ルポルタージュの先駆作。

現代思潮社

東京都文京区小日向 1-24 電話(943)4406

人文書を創る側から

司会 出版流通に問題があるといわれはじめてから二十年くらいになります。ところがこの二十年間にどれほど改善がすんだかは疑問です。むしろ、人文書などの流通状況は悪くなっている。コミックを否定しませんが、コミックや量販出版物によって、少数数の出版物が不当な扱いを受けている感があります。こういう状況の中で人文書出版社はどうすればいいのか。まず、最初に皆様の現状

認識からおうかがいしたい。

A うちのような小出版社は現在の流通制度に逆らわないようにせざるを得ません。買切りに持つて行ける刊行物でもないの、現況を肯定的に利用して生きるしかありません。最近、西谷さんの「出版界の虚像と実像」を読みました、あれは頭脳明晰なファイトーが出版で苦勞し抜いた告白の書で、出版人必読の名著ですね、一寸文章がくどいけど

出席出版社

東京創元社
(人文会)

秋山孝男

有斐閣
(人文会)

沢部英一

未来社
(人文会)

松本昌次

朝日出版

中野幹隆

晶文社
(人文会)

島崎勉

司会

小林一博

(笑) あれを読んで僕は恥しくなりました。かつては「志の業」としての矜持もあったのですが、今は志があるような顔をしながら「禁欲」どころか、量産へ傾きがちです。それを許容してくれる流通制度であるのが怖い。

S わたくしの方も固くて、真面目な本の出版社ですが、今は硬派の本が受け入れられない——との事実認識がありますね。たしかに第二次石油ショック後の状況をみますと返品

率が急上昇している。しかし、返品率の高いのは売れない本ばかりかというところじゃない。結果的には好成績を収めるのに新刊配本で読者に面接できない本が多い。ですから高水準の人文書の場合なら部数を絞り込んでいけば問題は起らない。基本的には、アカデミックなテーマなものを、一般の読者に向けて企画するような場合にやはり一番問題が起っている。その点、硬派の出版は相当これからガマンしていかないといけないと思います。

しかし、今の状況の中で、編集者としてみれば、もっと本を作るうえで工夫できなかったか、と思うことがよくあります。人文書に限りませんが、各分野とも外国の業績を紹介するような形の本が多いですね。そうするとオリジナリティがないから、読者は食いついてきません。ひろくいうと、硬派の本の不動の読者は学生さんです。その学生が、自分の読書欲で読んでいるかという点必ずしもそうではない。教授から指定されたために買っている。それに出版社が甘えている。編集者は、そんな状況に甘えてしまつて、著者からオリジナリティを引き出す努力が欠けていたんじゃないかなと思います。

H 編集者からの視点にしばっていえば、本の内容についての議論はおくとして、自分のつくった本の装幀、タイトルのつけ方、初版部数の設定、読者層の設定など、具体的なところで、読者にとどく工夫をしたかどうか反省がありますね。

司会 反省は次の本に生かされていますか。
H 試行錯誤ですね、手探り状態ですね。

■今までの問題意識ではダメ

N レクチュア・ブックスというシリーズで、学問の話を、作家のように直感的に問題を掴める人にきき出してもらうことをやりました。アカデミズムのもっている難しさを、やさしく取り出して読んでいただくことを考えたわけですね。

ある時、朝日新聞の若もの欄担当の記者から電話を頂戴しました。今、マルクスとかフロイトを劇画にしていくな企画がある、マルクス離れといわれているが、工夫がうまくおこなわれれば、難しいマルクスでも読んでもらえるんじゃないかと考える、と。

それについて考えますと、技術的に工夫するだけじゃどうもうまくいかないという気が

しますね。つまり劇画にするのは観念を翻訳して若い人の感覚に訴えかけていくことを狙うんでしょうが、果してそれでいいんでしょうか。問題はそれよりも、これまでマルクスを考えてきたような考え方で、もはや若い人の関心をひかなくなった。硬い言葉でいいますと、パラダイムといわれていますが、考え方のまとまり全体が変わりつつあるんじゃないか。

ですからマルクスの評価にしても、これまでの枠組みでマルクスを考えて、そういう視点から本をつくったのでは、成功しない。

今、若い人の感覚が視聴覚的メディアにいつているときですが、感覚がマルチブルに開発されようとしている時、書物は自分の位置を見直さなければいけないんじゃないかと思えますね。その際によりも問題なのは、問題の掴え方自体が変わっていることを出版社が敏感に感じているかどうかですね、技術の問題じゃないですね。

M うちが注文制をとっておりますので、委託制とは問題がちがってくるころがあります、十三年前に注文制をやったのは、うちで作っている本がなぜこんなに流通しないの

かという、素朴な疑問からスタートしたわけ
です。

だからといって注文制オンリーに考えているわけではなく、委託制がふさわしい本もあれば、注文制の本もある。本によって流通方法を考えるべきでないか、今ある流通方法を固定的に考え、それに合わせようとするからヒズミが出てくるんじゃないか。ぼくらの生き方でも同じじゃないかと思うんですが、現状に合わせるんじゃないかと、こちら側の主体によって形式を変えていく考えがないと、いくら流通問題を論じても何一つ変りはない。返品を一つ例にあげても少しも減らない。注文制をとった時、日書連に抗議されたが、決して押しこみ配本をしない、注文制で返品のロスを少なくしているのにそれに対しての理解がない。業界全体に返品がどれだけロスを産み出しているのかの自己批判がなくて、まだ現状にのっかっている。

先ほど装幀や書名などの工夫の問題が出ましたが、その点わが社は気にしていない。これはよくないことですが、そういうことや宣伝・流通経路などで本は一時は売れるでしょうが、結局、本は内容で勝負する以外にない

んじゃないか。

流通の問題は根本的な部分から考え直さないとまずいんじゃないか。うちでは初版千部から二千部、最初の注文は二百か三百です。読者は不便だという声もあると思うが、さすがすぐれた読者はいるんで注文してくれる。今、ぼくらはそういう関係しかとれない。業界全体がそうしろというんじゃないくて、ぼくらはそうせざるを得ないだけです。

司会 ロングセラーの本が、最初の委託の段階で半分以上、七、八割も返品になると話がありますが、なぜそうなのか。

■思い切った転換しているか

S 大量販売時代の出版流通の在り方の影響が大きいと思いますが、根本には読書界における不動の四番バッターがいなくなってしまうことがありますね。権威がなくなったら、若い人はそういうコケ威しで買わなくなつた。硬派の本の多部数出版の基礎は何かというと学生さんですよ。学生はほんとうに好きで読んでいるのか、と疑問を持たないで、売れているからいいやと思っていだら見通しを誤るでしょうね。

さつきマルクスの本を今の公式的マルクス解釈のまま劇画にしてもダメだといわれましたが全くその通りだと思えますね。マルクスを従来の文化人がどういう形で理解しているかといえ、まるで古いですね。

ぼくが十年くらい前、ドイツに行ったときにドイツの出版界も一種のマルクスブームでした。マルクス関係の本が沢山出ていました。この事情を向うのエディターやエコノミストにきいたりしましたが、日本のような、資本論解釈に終始するおもしろくないマルクスの本じゃないですね。西ドイツでマルクス・ルネサンスが起こったのは思想として見直しているわけです。そこが全然ちがう。日本の大学の講座で話されているようなマルクスをマングにしてもおもしろくないと思いますね。

じゃ日本のエディターは、思い切った転換をして、マルクスを本格的に見直しているかというところとどやっていない。役者がいないこともありますけれどね。エディターは裏方ですから役者がいなければ芝居打てないという事です。新しい要望があっても応じられない……。

司会 きょうのテーマからはずれますけれ

ど、役者がいないというのは大変な問題ですね。でも役者がいないのはほんとうにいないのか、育てないのか。育てる努力が足りないんじゃないか(笑)。育てるなんていうと、けしからん、編集者は生意氣だといわれるんでしょうが、本づくりは共同作業ですから。編集者が著者にどのくらい協同しているのか疑問に思うことがありますね。

■病んでいるのは出版社

M わたしなんか余り協同した経験はないんですけど、今のお話でいいますと、これは日本の近代の不幸だと思うんです。やはり輸入文化、輸入思想、それらのとっかえひっかえの連続ですね。むしろそれでほんとうに研究している方たちは優秀だと思っんですよ。

ある方がある人の言葉を引いていったけれど日本は精神的文化の無差別的生産、無差別的享受の関係ですね。外国からこれだけの文化が流れこんでいる国はまずない。そして国内の文化も多種多量を誇っている。しかし、この無差別的生産性と、無差別的享受性の関係はうっかりするとファシズムの母胎にもなります。人間がなんでも受け入れる容器化してし

まう。

人格じゃない。つまり盛り合わせ出版界が基本にあって盛り合わせ文化がある。そういうことでいうと、出版界の中で一番責任のあるのは出版社だと思う。取次が作ってくれなかったわけではない。(笑) さっき返品の問題も出たけれど、これだけ沢山作られたら書店だって受け入れ切れないだろう。もつとある種の消去の方法、文化とか、思想とか無差別的にでなく、これだというものを各出版社なり各編集者なりがもう少し選択してやる必要があるんじゃないか。そういう意味では日本の出版界は高度成長に最も寄与してきた、そしてその繁栄を謳歌したと思うんですが、うっかりしたら、新たなファシズムの基盤作りにも寄与することになるんじゃないか、と怖れを感じています。

魯迅じゃないけれど、病んでいるのは出版社の心が病んでいるんであってね、技術やなんかで治療できないじゃないか。

司会 本が多すぎるということからいいますとね、前から疑問に思っていることは、現在一年に新刊が二万七千点から三万点でいますが、昭和十年代の前半も同じくらいです

ね。ところが、昭和十年～十五年の流通は東京堂(業界第一の元卸)の扱いで書籍は五千から六千点です。出版点数が多いが全部は流通されていない。なぜそうだったのか調べていませんが、もし、出版社が自己抑制して五千、六千点しか取次に搬入しなかったら、流通状況はまるで変わる……。

A 五千点というのは意外ですね。

■最も必要な本だけを本に

N 制度の問題はよくわかりませんので、教えてもらいたいと思っっているんですが、たとえば「コミック、雑誌のラッシュでしわ寄せが専門書にきている」といわれていますね。私は、知の生成の現場に立ちあいたい、いわゆる哲学とか思想とかに関係する本が自分の守備範囲であると思っっていますが、一方で、できれば点数を増やさないで、一点当りの部数を多くできないものかと考えています。同時に、わたくしたちが考えている本と、なんとかに強くなる本、なんとかの仕方、あるいはコミック的なもの、告知板―カタログ的な本とは本質的にちがうのかしらと考えています。コミックなどとは違うものをやろう

としているのだから、したがって返品が多かったり、部数が出なくても止むをえないと考えていくのか、そのところがむづかしいです。もう少し視線をずらしますとね。ギリシヤの吟遊詩人の語りがホメロスの詩篇になったように、最も必要な本だけが本になった。それが文明だと思う。時間に蝕ばれないで後世に残るような本をつくっていきたいと考えるのは編集者の業のようなものではないでしようか、それでは、今氾濫している本と、わたくしがつくっている本は本質的にちがうのかと考えると、実はちがわないような気がする。

なぜかといいますと、すべての本ではシニフィエが言葉によって媒介されている。たとえ告知板の情報であっても読者は文字が媒介している意味を受けとっている。意味とか価値とか集蔵体としての書物が機能するかぎりにおいては、いろいろな層の読者があって、自分で必要だと思って買った本は学術書であれコミックであれ権利的には同じことじゃないかと思うのです。

だから、自分たちのやっている本は割りと特別な本だから、これは売れなくても止むを

得ない、と考えるのはちがっているんじゃないか。そうしますと今の制度をどういう風に直すのかといわれてもわかりませんけれど、少しでも多くの読者に読んでもらうためには何が必要か、もう一度考えてみていいんじゃないか。

司会 この座談会の案内で、人文書などが、コミックや雑誌ラッシュのしわ寄せを食っていると書きましたが、これらは別の流通ルートをもっている。週刊誌などは、三割くらいが、書店ルートで、残りは他の特別ルートを開拓して伸びている。人文書なども、新しいルートを考えられないものか。

■読者の運動に連携させて

H 具体的な例で話すと、二、三年前からわたくしどもで、演劇、音楽、文化、政治に関するアジアの本をやるうとしていますが、読者はいない。二千、三千の部数をはかすためにどうすればいいか、運動自体をいくつも組織していくことを考えています。出版社が中心になれるわけではないが、市民運動とか、地域運動とか、を拠点にして百、二百と手売りする方法で売ってもらえれば、初版部数の何

割かの見通しがついて企画が成立するのではないかと考えています。「読者を作る」というと不遜ですが……。

司会 第一次石油ショックで紙がなくなつた時「カミカゼ」だから企画を厳選しよう、という意見がありましたね。今、出版社は自社の出版を自制できないのですか。売れないから新刊を出す、新刊を出すから売れなくなる、という悪循環があるでしょう。禁欲できれば流通は改善できると思いますが(笑)。

S 専門書出版社がある一定の年月の間に生産規模を上げていった時、社員が増える。この時に問題がある。

企画の厳選といっても需要層をどの辺に絞るか……。ながい間の経験からいいますと確かに安全な路線はあるんです。けれども、規模が広がった時は安全路線だけではとてもやって行けなくなる。これが現実で、企画面で活路を開くほか手がない。試行錯誤しなければ結論がでないですね。新しい路線は作らないというのも一種の守りといえます。しかしバッテリーボックスに立たない守りだけでは野球に勝てません(笑)。

A 禁欲は理想ですけど下手に取り組む

とミイラになります。経済的な裏付けが必要です。僕はいろいろな出版社の方に会って話を聞いてみたのですが、二、三年前からすでに一種の減量経営を達成している社が多々あるのには驚きました。それらは云い合せたように金持ちのオーナー経営者です。社員を半分にした人も居る。「柔道の自然体になったからもう気楽だ」とうらやましいことを云う人も居ました。でもそう云う社は平素から社員さんの雰囲気は何となく暗いですね。これは一種のコンプレッションですが、貧乏人経営者やサラリーマン社長は不景気になるとすぐおろおろし、自信もないのに積極策に走り勝です。何事によらず人をまとめるのには積極策が一番手軽ですから。尤も大手は図体が大きくなっているから、噂が出ないように減量しようと思っても無理でしょう。それをあえておやりになる社があったら、僕はその社の労使に敬意を表します。

司会 禁欲の問題は、現実をみると、禁欲どころでなくて、多様化、多點化の方向にいつています。読者の方も少し味の違うのをほしいという欲求もついています。昔のように基本的な本だけを繰り返して読むようなわけに

はいきませんね。これが類書の氾濫を促していますね。

■ 一周遅れて、先頭に……

M 残念ながら、筑摩の倒産は基本的には人件費倒産ですね。結局、出版社が人件費出版に追われる。本当にやりたい本をやるんじやなくて……。

ある文庫本を出している出版社では、年間何千部という基準があつて、それ以下のものは切り捨てられてしまう。文庫本で切捨てられたら一種の「檣山節考」ですね。文庫本から単行本への復活はまず有りえないんですから。日本の文化の在り方によく似ている。こういうことにどこで歯止めするか。そのためには、これ以上本を消耗品化してはいけない。人件費経営になってはいけない。そこに来ている。

書店に入ってみるとよくこれだけの本が出ていると思ひながら、どれもこれも読みた。しかし、どれもこれも似たりよったりだ、という気もしますね。ちょっと違いがあるだけで際立った違いはない。しばらくたつとその本は切り捨てられていってしまふ。

ぼくのところは重版にもっていくのに苦労しますが、千四、五百点のうち千点以上稼働させるのに大変なことです。五百部でも重版していく、少しでも残していく。せっかくつくった本だから十年や二十年で消えるものじゃないぞ、というこちらのかかわり方があるからですが、固い出足のおそい本の重版はつらいことです。一時的に売れる本よりもロングにける本をつくりたい。黙ってゆっくり走っているとグラウンドを一周して、先頭と同じことになっているというのが、日本のサイクルなんです。それくらいの覚悟でやつかないかと、ますます日本は精神的多産と、精神的消費のゴミの山になって、日本の出版文化はゴミの山のように捨てられていく感じがするんですね。

司会 読者はすぐく変つていっていると思ひますか。中心部分の読者は変つてなくてよく読んでいるんじゃないか。

A そんなに変質しているとは思ひませんけど。

司会 読者が變つてしまつたのに、編集者や出版者が変わらないままで本をつくっているから本が売れないのか。読者の變化を掴み切

っていないのか。どうなんでしょう。

■最初は三百部でも

A 真面目な層をとると変っていかないと思います。その下に沢山の読者層が出来ていて、ここは情況で変っているでしょうが……。人文書、自然科学書など専門書——活字というものしか現在では学問の進歩や普及に寄与できるものはないと思いますしね。学問の進歩、発展がある限り文字、出版は減びることはないと思います。

量を増やそうとするから苦勞があるんです。その点を覚悟してしまえば、少しずつ発展しているんじゃないかと思えます。さきほどお話しがあった、最初は三百部でも必ず売れていく、そういうのを信ずるしかない。

ワラジ虫を一平方メートルの中に入れて一定の餌をやりますと繁殖しますが、増えすぎると自然に少なくなる、少なくなるとまた増えるそうですが、出版社も理念や申し合せでうまくやれといってもだめでしょう(笑)。

文庫本がいい例ですよ。さきの文庫本出版社なんか今までは重版一万以下は引き合わぬといっていたのが、昨年は一万三千いかな

と絶版にいたしますと著者に云ったもんで、から、著者はガックリきたらしい。それでなければ採算がとれないということです。文庫本でも二千部重版する社もあります。

M 経営の規模が小さければできます。わたしは、若い編集者が活躍している、ここにいえば晶文社とか朝日出版社などに期待していますが若い読者とどういう風に渡りあっているか、本をみると感じますね。

映像文化の影響はあるが、映像を元に戻せといってももう戻らない。文明は逆行できない。じゃ、どうするかはこちら側の問題なんです。そういう観点で、若い編集者のやっている出版社はヤンガーゼネレーションと渡りあっているなと感じますね。

かつてぼくらが若い頃、吉本さんとか、花田さんとか、埴谷さんの本をやった時は、若い読者とわたり合っているつもりでした。しかし、今は変ってしまった。

■やはり読者は変った……

N 読者が変わっているかどうか、という点では、やはり読者が変わっていると素直にみとめた方がいいんじゃないかと思えます。本を

読まなくなっているとは思いますが、本を読むスタイルは変わっています。勉強机に坐って一ページから最終ページまで通して読むことはおそらくないだろう。それはないが、自分に必要なところを、飛ばし読みかもしれないが、ともかく、確実に読むスタイルになっていると思います。

というのは、世界が多様化してライフスタイルが変わってきますと、本と向きあうスタイルも変わってくるのは止むを得ない。本が本来に必要であるならば、本は生き残るだろう。ただ、他のメディア、映像とか、オーディオとか、視聴覚器官を通して世界と向きあっている傾向が増えている。それは認めた方がいい。感覚器官をできるだけ全開しておいて、インターネットしていく巧妙な方法を若い人たちはとっている。その中に書物がどう食い込んでいくか。

それは方法があると思えます。先ほどの書き手の問題としては、ほんものの書き手は変わっていると思います。変らないのは、その○エピソードたちですね。

オリジナリティのある人は、見事に若い読者のプロダクティクに感じていますね。本

を通して会話していると感じますね。これは読者に迎合する意味ではない。著者は読者と同時に新しい文化をつくらうとしているんだと思いますね。

H Nさんと同意見で、読者の気風は変わっていると思いますね。Aさんがおっしゃっていますが、三百人なり五百人なりの基層は変わっていないと思います。その上に千五百部かそれ以上の部数を上のせしていくのが、われわれの関心事です。基層となる読者は、どんなタイトルつけようと、装幀しようとか、広告しなくても買ってくれると思います。しかし、あとの人をその本の世界に引き込んで採算をとらねばならないというのが、われわれ編集者に課せられているわけで、その読者は気風なりファッションで変わっていく部分ですね。そこをいかにつかまえるかの工夫がいる。

愛読者カードなんかみていると、十五、六歳の女の子から返事がくる。つくった方からいうとそんな読者にあてた本じゃない。読んでみると装幀が気に入ったから買ったとか、タイトルが気に入ったから買ったとか。それで読んでみたら結構おもしろかったなどと感想が書いてあるんです。こちらもうれしくな

って、それでは、次はこんな本を読んだらどうですか、と暇なときには返事を書いたりする。歩止りは悪いでしょうが、新しい読者になってくれればと思いますね。

司会 さきほど、文庫本の足切りの話しがありました。足切りの思想が出版業界に蔓延しはじめた。出版業も企業活動ですから採算を考えないわけにはいきませんが、余りにも採算とか、効率とかをいいはじめたために本に対する書店の対応が相当に変わってきているんじゃないかと思えます。きょうはその辺を中心におうかがいしたいと思っていました。その辺についてどうでしょうね。

■装幀が悪いと返品に

S 十五歳の読者の話もありましたし、装幀の話もありましたが、出版の範囲を新しい分野に広げた場合に、返品のスピードは物凄いですよ。かつて新しい分野に進出した時、勉強のために書店のその分野の棚の責任者の方の意見をききました。ところが、装幀がよくないとまず返すというんです。棚に並べないで……。(笑)

だから、そういう分野にトライする場合は

“良書なら売れる”じゃやっていけない。良書の上に、タイトルがよくて、装幀がよくて、と条件が揃わなければ書店の棚を占拠できない。しかし、その本は壊滅的成績だったかというところではない。猛烈な返品を食ったけれどもちゃんと重版をしてかれこれ十年くらいロングセラーになっています。このような事実は、どの分野にも起こりつつあるんじゃないでしょうか。

一般向けの本、つまり十五歳の少女も、たまもしかしら五十歳のオバさんも読んでくれるかも知れないという本の場合はまず装幀が悪いと、読者に対面する前に蹴とばされる。しかし、それは、書店のその棚の人が間違っているとは夢にも思いません。やはり編集者・企画者側の失敗ですね。

最近、高校の先生に話をききましたが、倫理・社会の参考書にある文庫本を買えと指定したところ、生徒はその装幀がよくないから買いたくないといったというんです。(笑) 少しぐらい高くてもきれいな本を買うという。これをああ嘆かわしい、といっていたら商売ならいんですね。

司会 本の組み体裁とか、造本のよしあし

は技術的に追求していくことで改善できますね。しかし、装幀の問題のように感覚上の問題になってくると、基準があつてないわけでしょう。難しくなりますね。

N 実際それは難しいですね。なんとか、読者のリセプターに引かかせるものを送っていかねければならない。本は外見やよそおいでなくて中に何が書いてあるかが問題である。とわたくしも思いたいわけです。しかし、最初読者のリセプターすりぬけると手にとってもらえない。

司会 さっきの話は、読者じゃなくて、書店が蹴飛ばすといっているわけです。(笑)

N 書店の店員というのは一番読者に会っているわけですよ。だから読者が手にとらないだろうと……。

S そうですよ。書店は経験踏まえてやっているわけです。(笑)

A 専門書と啓蒙書の差でしょうね。

■書評活動も弱い

M そこで、書評の問題になるんだと思いますが、本に対する批評活動も弱まっていると思いますね。書評者は本の内容でいくわけ

ですから、書店の店頭には並ばない、読者の手許にいかない本でも、書評者に内容を認められれば本は生きていくわけでしょう。だから読者との批評の回路みたいなものもどこかに回復しなければならぬ。一方的にでなく、送り手、受け手が往復運動をやる、それが批評活動だと思うんですが、その書評の力も弱くなっている。

いわばお座なり書評、紹介書評、仲間うち書評になって、出版界全体がそういう基本的な問題をないがしろにしているものだから、本当にいい本が生きてこない。出版界の各団体なども、もう少し書評について考えていく必要があるんじゃないか。

S その辺は読者層の変り目があるんじゃないですか、岩波文庫や東洋文庫に非常におもしろいものがあつたとしますね。学生も含めて今の読者はじかにそれに対して食欲が起らない、古典でいいものならじつとしてはなにも読んでくれる時代でなくなったのではないか。

しかし、そんな古典の中から誰れかが何かを再発見した形で本を書く、飛びついてくる。一番煎じを飲む力がなくなって二番煎じ

を飲むというような傾向がある。かつては翻訳文化の生硬さにアレルギーを起こしつつも古典そのものの読者が数多く存在した。が今ではもはやその生硬さを飲み込む読者も減ってしまったという面があるのじゃないですか。

司会 話題を変えたいんですが、皆様書店まわりやっていますか。

N わたくしはかつてはだいぶやりました。地方まで歩きました。

A だいぶ歩きましたね。

H ぼくはほとんど廻っていない。

N 企画を考える場合に、先生方とご相談して考えるよりは、また読者カードよりは、書店の方と話をしていた時に出的ヒントで立案した企画がいいですね。

■覚めた気持で書店をまわる

A 歩きますと、思いつきや思いやりで、「おいといてやるよ」といって一カ月もしないで返すような例は多々ありましたが、その中でほんとうのことをおっしゃって下さる方もありますね。僕はいまだにその方たちとおつき合いをさせて貰っています。

M 機会を見て廻りますが、本をおいてく
れというようなことは一切いいません。だか
ら、おたくの店はどうですかということ、
企画の話をするのですね。つまり商売と
別の話しですね。何といっても末端の書店は
一番大変だと思えますね。出版社というのは
考えてみればいい気なものです。取次でも
五時頃行ってみると戦場ですよ。そういうと
ころに行つて、いくらい本だといつてみて
も売れなければ書店や取次にはなんにもな
らないわけです。書店をみていますと、生活
実感を感じます。編集者のある種の傲慢さを
逆照射されることで勉強になりますね。

書店に行けばまず棚をよくみます。どの
社のものがどれだけ並んでいるかを。その上
で話しをききます。並んでいる本をみて、話
さなくていいなと思えばみただけで出ること
もあります。具体的なことを知るには書店が
一番いいですね。

司会 さつき書評についてのお話があり
ましたが、広告についておうかがいしたい。

M うちでは案内広告に徹しています。注
文制ですから案内だけはしなければならな
い。地方新聞にも丹念にやり、PR誌を発行

しています。結局読者からの注文をはねかえ
さないかぎり本が出ていかないわけです。か
ら、誰れにも頼れないわけです。ですからP
R誌を一番重視します。その定期購読者が書
店に注文してくれる。

A 書評三紙もマンネリ化して読書子をつ
かみそねていますね。

S 「これから出る本」はタダですけれ
ど、「サーージュ」は百六十円払つても、「これ
から出る本」よりいいんじゃないか、と思い
ました。若い人向きですね。

朝、毎、読の書評にしても、書評三紙にし
ても古いと思う。古い文化人のイメージで
す。もつとごく普通の人をなぜ対象にしない
かと、ずつと思つています。文化の香りとい
うことばかり考えているようで、それ扱うこ
とで、自分の新聞、雑誌のイメージアップを
はかっているようなところがある。読者には
いろいろな方がいるでしょう。もう少し考え
ないと、購読料払っている平均的な読者に申
し訳けないような気がしますよ。

●出版社はセクト的

M 出版社くらいセクト的なところはない
んじゃないですか。広告料金だつて一応基準
はあるけれど、実際は各社違うでしょう。そ
れが全部秘密になっている。取次さんとの関
係においても秘密ですね。出版社同士がとも
にやるなんてとてもありえない。皆、自社の
本が店頭にあつて他社の本が返品になれば喜
んでいるんじゃないですか。

書店に対しても棚とり合戦やるわけでしょ
う。自分のところだけというのが出版社です
ね。だから、書店に行つても自社の話だけ。
ほか、書店に行くとは他社の本のことをき
く。他社の本を「この本いいと思います、
売れていますか」ときく。変な話ですが、
出版社でも編集者関係はまずお互いに切れて
いる。なぜかという、企画の分捕り合戦な
んです。最近も経営が辛いといわれている
社がありますが、あの社なんか企画をとら
れているからです。類似商品が出てきたか
ら苦しくなったんです。

A 昔は、そんなにセチ辛くはなかった
ですね。でも、編集者の会はダメでした。ね。
作つてもつづかない。編集者のOBの会はあ
りますけどね、しかし、営業関係は問屋とか

書店という共通の壁が立ちふさがっているからお互いに仲良くやれる。(笑)

M 現役は企画が流れるから……。ぼくのところは、「売れこもう」という本がないから企画が流れてもかまいませんけれど。あとは著者の取りっこをやる。だからバラバラで、何ごとにつけ一緒にやることもできない。

それでいて、おれたちは文化に寄与している、普遍的精神にかかわっているというが、出版界の体質そのものは大変セクト的。

N 書評と広告のことで感想ですけどね。三八ツと、中ページの広告、連合広告を比べますとね、金額に比例して情報が正確に伝わるとはいえないようですね。私は三八ツが一番効果があるんじゃないかと思っています。

他社は存じませんが、書評は、朝日新聞の書評が一番部数にはね返ります。書評新聞の場合はほとんど部数にはね返りがない。しかしですね、T L S (タイムズ文芸付録)のような書評紙が日本でも出来てもいいんじゃないかと思えますね。

司会 昔の書店には大卒はほとんどいませんでした。今は大卒の店員が普通になってきました。出版社もピンからキリまであります

が、出版労連に加盟しているような出版社の場合、社員の待遇は書店員と隔絶たる差がありますね。この問題を放置していいのか。

全く異なる生活レベルの者が「本」でつながっているわけですが、つながりきれなくなっているのじゃないですか。それじゃ編集者の給料を下げるか、というわけにはいかないわけですから、書店員の方をあげてもらわなければならぬ。

■愛嬌がないから噂に

A 出版社に限りませんが、ある変動が起きつつあると思います。わたしはこの正月テレビをみていましたら、草柳大蔵氏が司会する座談会がありまして、アメリカのUAW

(全米自動車労組)の一時間当り賃金が十五ドル何セントかで、アメリカの一般労働者の倍近い賃金だそうですが、その人達の作った車が売れないからと云って日本車を締め出すとするのは無理ではないか、その点は交渉の中で仰言ったんですか、と草柳氏が石原日産社長に訊ねていました。なぜ賃金が平均の倍か、とも聞いていました。それに対して石原氏はビッグ・スリーで大型車を独占して世

界中に売りまくったから相当儲かったんですよ。だからあの賃金も出せたとし、獲得したんでしょ。と答え、後を斉藤新日鉄社長その他の人が続けて、日産などの賃金は厚生福利費などまで含めるとアメリカの一般労働者とはぼ同じなんだ、そのうえ日本の企業では近年労働者の「自主管理」制度が発達した。この制度は彼等には驚きらしく、自主管理と云う言葉が今やそのまま英語になり、発音しにくいので彼等はJ Kと云って真似をしようとしている。こう云う日本人の作った車と、高賃金で契約以外のことはタテのものをヨコにもしない労働者が作った車では本来競争にならないものだ、と言うのです。

これを出版界でみますと、大型の雑誌なんか出している社はあれだけの高賃金を出せるし、また獲得すべきです。書籍専門の出版社でもいい在庫があり高額図書のいい紙型がある社は、発注伝票さえ書けば下請会社は何千万円分でも製造納入してくれますから、重版が売れていれば高給を出せます。年間の新刊と重版の点数比が一對十以上であれば、自然に天國的経営ができます。そうでなければそれに対応した社内体制を作り出すか、あるいは

は積極策に社運をまかすか。

ついでに云いますと、この頃は不景気なものだから、いやな話が耳に入りますが、去年の暮にはI社にまで悪い噂が出た。私は偶然あの社の四年間の決算書を見る機会がありましたが、流動負債一〇〇に対して流動資産は二五〇、当産比率は一〇〇でこう言う出版社は上の部です。しかも手形は一枚も出ていないし借入金がありますが、月商のたった二カ月分です。固定資産はたつぷりあり、その上あの社は半世紀以上銀行は一行主義です。潰そうと思っても潰れない健全優良会社ですね。それが変な噂になった。考えてみても理由がわかりませんが、要するにあの社は紳士揃いだ、何となく愛嬌がない(笑)。

司会 残り時間が少なくなりましたので一言ずつでもおうかがいしたい。流通に対して……。

H 言い古されたことですが、本を知らない店員、傍の棚に本があるのに、たずねられてもないと答えている店員が多すぎますね。

われわれは本を作る時、この本はどの棚においてもらいたいと考えて本をつくるわけです。タイトル、帯に工夫しているのですが、実際書

店ではとてもない見当ちがいの棚におかれている。そこから始めたい。我慢くらべです。

■書店は勉強している

N 最近、勉強している書店の方が増えていると思います。勉強している書店員が増えていることで、わたくしどものような出版社は、心強く思っています。書店員と読者とわたしどもとのつながりでも、書店から、著者を店頭につれてきてほしいといわれます。つまりこれまでですと、サイン会で本を売っていくケースが多かった。そうではなくて、著者どちに話したいという読者がいるというわけです。読み手は一方的に読み手、書き手は一方的に書き手であるという関係ではない、新しい関係を、書店員が媒介者になって考えている例がある。

書くことの特権を読み手が稀薄化して追体験するのではなく、書くことは読むことの変質にすぎないという考えの実践です。

そういうものがうまく出来ていきますと、今までは非常に出来にくいといわれていたサロンができるのじゃないか。積極的に本について考えている店員が増えている。そういう

書店員と一緒に仕事をしていきたいと思っています。

司会 最近、取次や、書店がブックフェアをやる例が増えておりますが、その傾向、内容についてどう思いますか。

A 感心しておりますし、感謝しています。うちの社の本はそんなに売れませんけど……。試みは高く評価しなければならんし、今後も普及させてほしいですね。

M ぼくは極端ですけどね、流通問題の元凶は出版社だと考えます。(笑)

書店をみましてね、あれだけの量の本を扱う仕事は大変だと思えますね。また、あれだけの本は憶え切れないですよ。これでは書店もその日暮しになり、店員の教育もおろそかになる。それと、読者の方も、書評が出ると、書名も憶えないで何とかの本はないかとウロ覚えでいつてくる。それを一々きかなければならない。その現場の面倒くささ。読者の中には、版元に電話してきて、こういう勉強したいけれど、どんな本がいいでしょう、という人さえいる。自分で本を探る努力をはじめから放棄している。本を読むことは、あの種の面倒くさい手続きがいるんで、人にきけば

さっと手に入るといふようなものじゃないことをいいたいですね。

本を一冊手に入れるには時間がかかり、準備があり、金もかかる、そういうことを経てはじめて読書がある。読書とは本を開いた時にはじまるんじゃない、前提があるんだと思う。それをインスタントラーメンみたいに、インスタントに知識を得ようとする。そうすると書店もインスタントに処理しなければならなくなる。書店は、出版社と読者の狭間に立って四苦八苦していると思う。

その中で、書店でも何かやろうと思う人が増えてきているし、東販なんかもで人文書フェアをやったが、あれなんかも豪華本フェアに比べたら儲けは少ないでしょうけれど、ともかくやってみようということです。

こういう例などをみますと、出版社側が非難する以前に、書店や取次は考えている。本が売れなければ死活問題だし、死活問題と同時に本を売ること意義を発見したいと感じはじめているのだと思いますね。

■悪いのはうちの社

S さきほどいわれたような書店の対応も

ありますが、今、書店が悪い、取次が悪いといつてもしょうがない。それよりも、素直に出版社の方が悪いと思うんですね。

十年前の本と現在の本を比べると重版の回数がちがいますね。これをみてもかつてよかったものが、今よくないといえます。しかも早いサイクルです。これは書店だけの問題ではないですね。

読者の側に、装幀がきれいでない本はいやだという傾向がありますが、内容についても、昔と同じ書き方では困るという要望がありますね。ところが、専門書の版元がちょっと勘ちがいするのは、今まで自分たちがよく売ってきたと思っている本でも本場に読者の知的欲求から売れたのか、というところではなくて、生活必要からなんです。必要とは国家試験などからみ合っているという意味です。専門書といつても、そういう関係の本と一般向けのものとは違いがあると思います。

結局今でも日本では東大法学部出た人が一番えらくなると思われている。大蔵省から一流銀行に天下る人はそういう人でしょう。それが学歴社会の根幹としていまだにある。それをめざして勉強する人があり、法律の本が

売れる。こんな仕組みがある。

それについて経済の本が売れる。経済につづくのが、心理学、社会学の本ですね。それにかつては、女子大の文学部心理学科出てもなかなか就職するところはありませんでした。今は家裁や少年鑑別所などに就職できるようになった。それは国家公務員だから試験を受ける。つまり、大学を卒業し試験を受け、就職する、そのための本に支えられているといえますね。こういう本を編集すること、一般の市民の知的欲求を満たすための本の編集とはどこが違うのか。そのことをはつきり知らなければいけない。

書店や、取次はそんな形の需要であれ、趣味の本の需要であれ同じように扱っています。エディターは、そのところをはつきり見極めておかれないと失敗すると思います。

今、アメリカのノンフィクションの翻訳がよく売れています。車はメード・イン・ジャパンが強いけれど本は弱いですね。これなども冒頭の話に戻りますが、著者を発掘し、オリジナリティのある本を作っていく努力が足りなくて、書いてくれればいいという拙速さに問題があるんであって、本を作ったあとの

流通の問題だけじゃないと思います。

書店にも取次にも罪なんか全然ない。悪いのはすべて出版社です。そう思いますね。(笑)。

編輯体制にのっかかる出版社

M 出版社自身が生きるために行きあたりばったりなんです。たとえば、いまの試験問題のように空欄を埋めよ、○×で答えよ、などの勉強をさせられてきたら、全体の内容をどう読みとるべきかの訓練はできない。ところが○×式になってくると、そのための本や参考書を出版界がつくる、それに乗っかる。いつてみれば出版社ぐらい体制側に乗っかる業界はない、といっている。朝日でも毎日でも受験期になると週刊誌で大学別合格者名簿なんかを掲載したりして学歴社会・受験戦争に拍車をかける。本が読まれないとかなんとか言うが、読まなくなる基本部分に出版界やジャーナリズムは協力しているわけですよ。出版界みずからそういうところに批判を加えるとかしなければならぬと思いますね。

司会 いつも思うのですが、営業が取次に行くのは専門家として当然ですが、書店には

編集者を含めて全員で月に三日くらい廻るようにしたらどうでしょうか。週刊誌の記者などは無理でしょうが。行くだけでもいい、行けば話すでしょうから……。

S それは言われてやったのでは話にならないんだけど、わかっている編集者は皆やっています。それをやらない編集者は基本的にダメじゃないですか。

司会 その訓練を若い人に対してやっていますか。

A わたくし、やっていますし社の者にも女、子どもの、本や雑誌を買うときは近所の店でいいから特定の店を決めて、その店と懇意になって話しをしろといっています。店の方で、これは返品してくれといえ、かまわんから引き受けてこいとい、書店の営業感情、生活感性がわかればそれが編集や造本やその他に必ず役に立つ、といっています。

S ばくも、自分のつくった本は気になるから書店には日参して、今日は何冊減ったかを見に行きましたが、これは編集者なら誰でも言われなくてもやりまますよ。

A わたくしの入社した頃は、自分の担当した本が出たらその日に日本橋三越の書籍部

と新宿紀伊国屋と、六本木の誠志堂、この三カ所を二回まわれといわれました。それから地方書店一軒を決めて、電話でききました。一冊売れても胸がときめき、どんな人が買って下さったか注意してました。

S 本の中には黙っていても売れる本があれば、売ろうと努力した結果売れている本がありますね。しかし、どちらかというと、営業や流通関係者は自分で売ろうと思う本を見つけて売ってほしいですね。

司会 今後とも回を重ねてゆきたいと思いますが、短時間にいろいろとありがとうございます。

後記 座談の整理はやつかいなものです。紙数の関係でかなりの割愛があり小林氏のご苦勞は大変でした。以後も御協力願ってうめてゆきたいと思います。ご多忙のところを本場にありがとうございます。

弘報委員会

名古屋地区からの報告

専門書ブック・フェアを考える

—名古屋・理工学書フェアの総括から—

日本出版販売株式会社

書籍調整課長 金子 栄

昨年は東販が「二万点人文社会科学書フェア」を、東京を皮切りに、大阪・京都・名古屋・福岡・札幌・仙台で開催し、他方、日販は理工学書フェア「明日の技術を開発する本」二万点フェア」を前年にひき続き名古屋で開催しました。取次が積極的に専門書分野に光をあて、多くの読者に専門書購買の機会を提供した試みとして、すでに各方面から評価されていることは改めていうまでもありません。今年もひき続き、各種のブック・フェアが、昨年にも増して展開されようとしており、専門書販売に苦勞している出版社としては大いに歓迎です。

さて、今回は名古屋の両ブック・フェアの現場の担当者からレポートをいただきましたのでご報告いたします。

弘報委員会

日販では、80年10月24・25・26日の3日間、昨年に続き名古屋市・豊田ホールに於て開催いたしました「80明日の技術を開発する本、二〇、〇〇〇点フェア」は3日間の総入場数八一六八名と当初の予想をはるかに上回る大盛況のもとに終了いたしました。

昨年は「わが国ではじめての理工学書ブック・フェア」として多くの方々注目していただきましたが、今回の第二回ブック・フェアを同じ時期に、同じ場所で開催することに昨年と違った見方、期待をされ開催まで種々検討を重ねてまいりました。

△毎年同じ時期に同じ場所で開催することについて▽

日販がこのブック・フェアを企画いたしましたのは数年前に杉浦社長より「専門書においては書店様の棚スペースには限りがあり、

どうしても常設の棚スペースを持って出版物がそこに展示されるという場所が必要だ」という考え方にに基づき、専門書の常設店をつくる検討をしてきたわけですが、いろいろ困難な問題も多く実現にいたりませんでした。それで、専門書常設店に代って地域ユザイの開拓と読者サービスの一環として企画、実施したのが昨年11月13・14・15日の名古屋市・豊田ホールに於けるわが国ではじめての「明日の技術を開発する本、二〇、〇〇〇フェア」の開催であります。以上のような背景をもつて第二回理工学書ブック・フェアを本年も同じ時期に名古屋に於て実施したいと考え、工学書協会他多数の諸機関のご協賛、ご後援をいただき開催したのであります。

昨年に続き、同じ場所で開催するにあたり、お客様の動員について懸念するむきもありましたが、幸い左記、アンケートの集計が示す通り二年続けて開催したにもかかわらず、まだまだ潜在読者は多いものだ感慨を新たにいたしました。

△アンケート集計▽理工学書の展示会を見たことがありますか

項目	昨年この 会場で	今日はじ めて	合計
人数	二二一名	一一八五名	一、三九六
占有比	一五・一%	八四・九%	一〇〇%

また、年二回以上の開催希望も多く、次の開催を期待しているとの意見が多数寄せられました。

△展示会の状況▽

“明日の技術を開発する本、二〇、〇〇〇点フェア”のテーマのもとに二回開催いたしました。協賛出版社、展示内容共に大きな違いが見られました。協賛出版社は一五〇社から新たに八〇余社のご協力を得、現状で可能な限りの出版社のご参加をいただきました。

展示内容におきましては、常備寄託商品以外のものに重点を置き、通常店頭で見られない商品を積極的に揃え、分類についても昨年の売上げ分析を参考に九二分類から一〇三分類とし各分類毎に色別に分けて展示いたしました。

また、今回のフェアにおいて三つの特設コーナーを企画。“新刊コーナー” “コンピュータ

ター関連図書コーナー” “エネルギーコーナー”と各々のコーナーを設け、読者の見やすい、選びやすいスペースを設置したことが好評でした。中でも新刊コーナーは54年11月以後発表されたものを一ヶ所に出品展示することにより、書店店頭における委託期限切れ商品が、短期間に再び読者の目にふれる機会があったことも好評でした。会場レイアウト・分類・展示方法等支店において地元書店様のご協力をいただき、種々相談してすめた事が左記の結果です。(アンケート集計)

①展示図書について

種類が豊富 三九・四%

適当だった 四三・四%

②展示方法について

見やすかった 四〇・七%

普通 五一・三%

△読者の動員と宣伝▽

3日間の延入場者については、一日目 二一五二名、二日目 三三三八名、三日目 二七七八名、と総計 八一六八名となりました。このうち二日目为例にとりますと、展示時間九時間でみると一時間平均・約三六〇名が入場したことになります。昨年の場合も予

想を上廻る盛況でしたが、今年は更に40%増の入場者があったことは、今回のブック・フェアが売上げとは別に、読者の期待に充分こたえ得たことと確信するものであります。

更に、このブック・フェアの重要な課題として、図書館はもとより、各企業内に図書館・図書室の設置をすすめ、理工学書の啓蒙を計る事も重要なことのひとつでした。

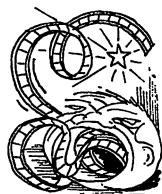
出品目録の作成により、フェアの概要を知っていたのと同時に、図書室設置のための事前準備・見本銘柄のチェック等を推進し、そのために前回に引き続き約三〇〇〇社の企業訪問を実施しました。延々20日間に及ぶこの促進活動は、前回の訪問先を重点に、更に四〇〇社を加えたもので結果的に大幅な入場者の増加となったものと判断しております。

出品目録は現在も活用され、書店様が入り先の企業、学校等へ促進していただいた結果、追加注文も目立ち、また、出品目録が各企業の必備図書として揃えられていることがわかり、今後更に読者の活用しやすい出品目録の作成を検討しております。

今後ともブック・フェアを継続するためには、いかにして読者ニーズに応えるか、いか

にして潜在購買力を開発するか等勉強するべき問題が数多く残されました。宣伝計画においても、新聞、ポスター、チラシ、DM等改善すべき点はどこか。物流面ではどうか。更に会場入場者がブック・フェアの終了後はどのような形で書店様の固定客として結びついたか……今回の第二回“80明日の技術を開発する本、二〇、〇〇〇点フェア”は昨年にも増して問題提起の多いブック・フェアとなりました。これら種々提起された問題を充分吟味し、解明しながら明日の技術革新に、より貢献できるよう今後も続けて、よりよいフェア開催に努力を傾注していく覚悟であります。

最後にこの度の「明日の技術を開発する本二〇、〇〇〇点フェア」にご協賛ご協力いただきました関係各位に心からお礼申し上げます。



80年人文社会科学書

二〇、〇〇〇点フェア

東販名古屋支社

熊澤 縣吾

東販名古屋支社では中部東販会の共催と六団体等一五八社の出版社の協賛、中日新聞本社後援で、昨年一〇月二三日より一〇月二五日までの三日間にわたり、千代田生命ホール（一五〇坪）において八〇年人文社会科学書二〇、〇〇〇点フェア（名古屋会場）を開催しました。

当初大変不安な面が多々ありましたが、出版社・書店様の絶大なるご支援、本社の全面的な協力に勇気づけられ、佐藤支社長を中心としたプロジェクトチームを結成し、支社員全員が一丸となり取り組んだ結果、販売目標を大幅に上回る成績で終了することができました。これもひとえに主旨に賛同いただき、絶大なるご支援、ご協力をお寄せいただきました中部東販会書店様、出版社各位のおかげでございます。この紙上をお借りし、改めて厚く

御礼申し上げます。さて、今回のフェアについて全般的にふり返ってみたいと思います。

書店様の反応

人文社会科学書が広範な分野からなり多品種少量販売の典型で、日頃書店の店頭で手に取ることが出来難いという認識を私どもは抱いておりました。しかし資料性に富んだ人文・社会科学書を一堂に展示し、読者へ選書場の提供するというフェアの主旨及び詳細内容を理解していただくため、書店合同企画発表会を開催する予定でしたが、種々の事情により取り止め、それに代り、中部東販会の協力で「人文フェアだより」の発行を重ね全国各地の名古屋フェアの状況報告（各書店様のとりくみ等）をし、それと同時に核店づくりとして書店打合せ会を名古屋市内を中心に一五会場で行ない、積極的に準備を重ねました。

九月初旬、フェア最大の武器である三分冊目録を中心とした拡材が出来上り、いよいよエンジンが全開しました。目録、ポスターとも、大変好評で、特に目録の追加注文が相次ぎ配本に苦慮する程の反響があり、うれしい悲鳴をあげたほどでした。ある書店様で

は目録を配布したその日に早くも大学図書館の見本調査をされ、東販に注文が舞い込むという幸先のいいスタートを切りました。ボスターも大半の書店が店頭様の目立つところに貼付され、又同時に自主的にタレ幕看板等を作成され、店頭ムードをより上げていた。いた書店様も数多くありました。以上のようにこのフェアに対する積極的な書店様の心意気が成功の第一の要因であったと思います。

読者の反応

三分冊目録、案内状等を携え、愛知・岐阜・三重各県の高校二五〇校、高専七校、短大五一校、公立立大学校、公立立図書館一〇館、企業八五〇社にハンドDM（案内状を直接手渡す方式）と、幼稚園・小・中学校約一、五〇〇校にDMというように、三県下の市場を網羅するPR態勢をとりました。

その結果、公立立図書館、学校関係では待望しいフェアであると高く評価され、ボスター貼付も協力的で関心が高まりました。企業については当初、こちらで意図するところまでゆけなかったのですが、今後は、回数を重ねることにより実効を上げたいと考えます。このことは会場入場者構成比に於ても、学校

関係者四四・二%に対し、企業関係者は一六%と数字にもはつきり表われていました。今後は各企業に対する事前の根回しを根気よく展開していくことによって成功させるようにしたいと思っています。

パブリシティの反応

趣旨書にて、フェアの意義を伝えたところこれに賛同され、中日新聞・朝日・毎日・読売・日経・中部経済・名古屋タイムズ・日刊工業・名古屋商工会議所会報等に取り上げて頂き広く、一般読者に報道されました。フェア初日には、名古屋TV、中京TV二社が会場取材をし、その日の夕方早速、ニュースショー等で放映され読者の会場動員に大いに貢献しました。

会場動員PRについて

(1) 中日新聞一頁広告

一〇月二三日付、出版社の協賛を得て掲載しました。中日新聞は東海地方を初め遠く北陸までをカバーするせいもあってか、この広告は、顧客動員の最大の原動力でした。

(2) 街頭チラシ配布

一〇月二三日の早朝、名古屋駅、県庁、栄、金山千種駅などで、女子社員も含め名古屋東

販社員総出で通勤通学途中の人々を対象に一〇、〇〇〇枚のチラシを配布しました。

(3) 街頭宣伝車

社員の提案により自発的に、一〇月二三日から一〇月二五日の午前七時〜九時、午後二〜一時まで、名古屋の繁華街を中心に社用車五台を一編成として、二編成（車一〇台）でスピーカーから道行く人々に会場案内を呼びかけました。街頭チラシ配布と相乗効果があり、初めての試みでしたが予想以上に反響が強かったと思われます。

(4) 電柱のポスター貼付、案内板の設置

栄周辺、会場周辺を集中的に展開し、今まで述べた各種の宣伝と結合することができ、効果がより高いものとなったようです。

会場販売について

千代田生命ホール（一五〇坪）の会場で約二二、〇〇〇点の展示商品は本社と同様に分類別、三ゾーンで目録掲載順に陳列し、在庫僅少本コーナー、雑誌バックナンバーコーナー、目録コーナー、即売コーナー等を設け、専用スリッパ発注方式で選書をしていただきました。御注文の際受注カウンターで三枚複写の特製用紙（読者、書店、取次控）に全点転記、

受注集計及び事故防止の徹底を期しました。

<表I>

10月	入場者数	売上冊数	売上金額	出席書店		出版社	
				軒	名	軒	名
23日 (木)	1,517	4,560	10,867,310	71	102	57	70
24日 (金)	1,801	4,867	11,246,590	49	57	39	46
25日 (土)	2,312	5,372	12,098,670	51	75	29	34
計	5,630	14,799	34,212,570	171	234	125	150

控を統一書式のスタイルで管理することは、未着、品違い等、照合の際スムーズに処理が出来、書店様にも好評で、なおかつ今後の貴重なデータにもなるはずです。

表Iのように多数の方々に御来場賜わりましたことは、いかにこのフェアが読者、ならびに業界関係者の話題を呼んでいたかわかる

と思います。

一〇月に名古屋市立各小中学校に名古屋市教育委員会より研究費（従来図書券が支給）の交付があったことも、このフェアの関心をたかめた一因ではなかったかと推測できます。又開催を通じ男子社員はもとより女子社員が率先し、参画意識を持って、フェアに取り組んだことも、このフェアを成功させた要因であります。

その他―反省点としては―

1 フェア総ての点で、名古屋市内の場合は充分な結果が得られましたが、それ以外の愛知・岐阜・三重県下について、全体の結果からいえば、なお促進の余地があるはずです。

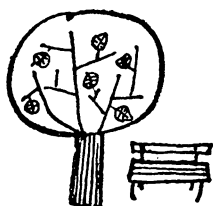
2 僅少本、雑誌バックナンバーに特に期待と関心が強かったのですが、展示冊数・内容が不十分だという声がありました。

3 展示商品の注文にも拘らず品切があった点は出版社に反省してもらいたい点です。

4 開催日に日曜日がなかったことは、集客という観点からもう一つという感じでした。

5 目録作成後の新刊追加目録の発行は当初予定されましたが、実現できずに、残念なことをしました。

以上問題点、反省点等、多々ありましたが今回のフェアで得た経験を踏まえ、更に、内容的によりよいものを考え、読者アンケートのみにみられる多数の皆さんからの要望を取り入れながら、継続的に本と読者との出会いの場をつくり、社会的使命を果たすべくこの種の専門書フェアを開催していきたいと思います。



人文書担当者名簿

昭和55年10月現在

地 名	書 店 名	帖合	コード	担 当 者	地 名	書 店 名	帖合	コード	担 当 者
函 館 市	森 文 化 堂	ト	11—01	吉 川 武	弘 前 市	今 泉 本 店	ト	15—41	三 上 ひとみ
札 幌 市	旭 屋	ス	30	奥 山 文 幸	福 島 市	岩 瀬 コ ル ニ エ 店	ト	13—04	栴 谷 裕 士
〃	三 省 堂	ニ	B 18	藤 岡 徹	郡 山 市	東 北 書 店	ニ	A 21	渡 辺 一 明
〃	紀伊國屋札幌店	ト	9—2—3	村 田・川 村	〃	西 武 郡 山 店	ト	43—91	吉 田 英 男
〃	富 貴 堂	ト	9—9—03	東 隆 一	仙 台 市	ア イ エ 本 店	ニ	B 19	庄 司 けい子
〃	ブックスアテネ	ト	9—9—02	藤 島 清 隆	〃	金 港 堂	ニ	B 19	鹿 又 真 夫
〃	丸 善	ニ	B 18	藤 原 功 功	〃	高 山 書 店	ニ	B 19	菅 野 典 子
〃	リーブルなにわ	ニ	A 12	荒 山 敏 明	〃	丸 善	ト	9—10—3	山 田 章 一
〃	なにわ書房	ニ	A 12	佐 山 昌 利	仙 台 市	宝 文 堂	ト	9—10—2	永 野 寛
〃	北大クラーク店	ニ	A 12	広 田・片 岡	〃	ア イ エ 駅 前 店	ニ	B 19	武 山 勝 太 郎
〃	北大教養店	ト	9—5—09	磯 部 健 司	〃	八 重 州 書 房	也	D 54	谷 口 妙 子
旭 川 市	三省堂アムズ	ニ	B 18	竹之内 一 彰	〃	東 北 大 生 協	ス	31	伊 藤 敏 幸
〃	ブックス平和	ト	13—03	深 山 美 代 子	山 形 市	遠 藤 書 店	ト	24—14	吉 川 重 太 朗
帯 広 市	田 村 駅 前 店	ト	12—16	田 村 光 子	〃	八 文 字 屋	ト	24—15	安 達 宣 也
北 見 市	福 村 書 店	ト	13—16	松 岡 敬 士	千 代 田 区	プレスセンター丸善	ニ	C 71	金 子 正 義
秋 田 市	加 賀 谷 書 店	ト	14—36	伝 農 隆 三	〃	丸 善 お 茶 の 水 店	ス	21	村 山 典 子
〃	三 浦 書 店	ニ	A 17	渡 辺 久 子	〃	茗 溪 堂	ス	12	坂 本 廉 平
〃	三 光 堂	ニ	A 17	南 和 子	〃	三 省 堂	ス	11	鈴 木 明 人
盛 岡 市	第 一 書 店	ト	16—39	石 川 伸 作	〃	書 泉 G・D	ス	25	桜 山 二 三 雄
〃	東 山 堂	ト	16—33	関 和 雄	〃	書 泉 B・M	ス	25	土 屋 一 夫
青 森 市	成 田 本 店	ニ	A 16	成 田 実	〃	東 京 堂	ス	26	佐 野 衛

地 名	書 店 名	帖合	コード	担 当 者	地 名	書 店 名	帖合	コード	担 当 者
千代田区	ウニタ書舗	ト	73—29	木村正樹	目黒区	都立大生協	ス	18	植草修
"	富山山房	ニ	C 105	中村章	世田谷区	京王書房	ニ	A 65	照屋透
"	信山社	ス	26	後藤裕	"	甲文堂	ト	74—44	越石武史
"	旭屋水道橋店	ス	12	和田守雄	"	近藤書店	ト	74—38	近藤道男
"	明治大生協	ス	21	関敏男	"	パル・キリン堂	ト	76—00	富川義朗
"	前田書林	ト	72—33	伊能勇	"	紀伊國屋玉川店	ニ	C 89	伊藤重俊
"	山王書房	ニ	C 98	福山美智	新宿区	紀伊國屋本店	ト	79—39	細川貴美江
"	政文堂	ニ	A 70	山森悟之	"	三省堂新宿西口店	ト	79—34	米川・佐伯
"	法政大学生協	ス	15	高崎茂之	"	芳林堂高田馬場店	ニ	C 93	古藤誠介
中央区	丸善本店	ス	1	藤川充弘	"	早稲田大本校	ス	15	秋山孝比古
"	近藤書店	ス	2	畑中忠義	"	三省堂高田馬場店	ニ	C 88	西田仁道
"	教文館	ニ	C 99	鯨岡照一	"	敬文堂	ト	81—01	金子富春
"	旭屋銀座店	ニ	C 87	武藤郁子	"	多磨書店	ト	76—35	中矢龍太郎
"	福屋書店	ニ	C 95	斎藤好久	"	成文堂(早大)	ニ	C 107	田中・中村
"	八重洲ブックセンター	ニ	C 103	勅使河原真	"	早稲田大文学部	ス	52	池田洋一
港区	虎ノ門書房	ス	3	吉岡広一郎	江東区	新栄堂亀戸店	ト	79—10	蒲生昌明
"	慶応大三田	ス	19	永堀惣一郎	品川区	明屋	ニ	C 82	江口哲男
台東区	京成明正堂	ニ	C 102	清宮俊二	大田区	栄松堂	ス	7	山本忠敬
文京区	東大本郷	ス	14	織田・佐々木	"	ヤマト書房西館	ト	81—06	白居豊彦
目黒区	八雲堂	ト	76—06	新倉弘	渋谷区	青山学院大購売部	ス	19 A	工藤純一
"	不二屋書店	ト	76—09	岡村昌作	"	三省堂	ト	79—83	三浦義則
"	恭文堂	ト	76—05	佐々昌之	"	国学院大購買部	ニ	A 82	野々川豊
"	三省堂	ニ	C 75	佐藤英之	"	大盛堂	ト	79—32	山下雅夫(3 F)
"	東大駒場	ス	16	内山郁夫	"	紀伊國屋渋谷店	ニ	C 91	道端成雄

地 名	書 店 名	帖合	コード	担 当 者	地 名	書 店 名	帖合	コード	担 当 者
渋谷区	紀伊国屋笹塚店	ニ	C 110	深 谷 比佐志	国立市	一橋大生協国立	ス	17	山 田 光 子
"	旭 屋	ニ	C 88	平 野 新太郎	小平市	" 小平	ス	17	渡 辺 誠
中野区	明 屋	ニ	C 82	伊 藤 重 則	立川市	鉄 生 堂	ニ	A 83	鴨 下 善 行
杉並区	ブックセンター荻窪	ト	81-11	磯 和 正 憲	"	オリオン書房	ト	75-14	大 原 匡 夫
"	積文館荻窪店	ニ	C 90	鈴 木 学	八王子市	くまざわ書店	ニ	C 76	吉 野 行 雄
"	ブックセラーズ西荻	ト	81-22	河 西 基	"	中大生協多摩店	ス	13	斎藤光雄・村上
"	書 原 也	A	98	外 山 善 昭	町田市	久 美 堂	ニ	A 76	中 村 利 樹
"	東京女子大	ス	18	井 上 眺 子	"	久美堂小田急店	ト	70-00	山 田 和 男
"	明大生協和泉	ス	19 A	小笠原 寛 行	"	有隣堂町田店	ニ	C 78	比留川・日 高
豊島区	成文堂学習院店	ニ	C 107	阿 部 俊 郎	川崎市	文 学 堂	ニ	C 72	塚 田 勝
"	西武ブックセンター	ニ	C 84	菊 池 壮 一	"	ブックセンター文教堂	ト	52-74	五十里屋 正雄
"	三省堂池袋店	ト	79-84	児 玉・村 田	"	江崎向ヶ丘店	ト	37-84	田 沢 孝 志
"	旭屋池袋店	ト	79-97	須 部 好 江	横浜市	ジョイナス栄松堂	ト	82-34	北 村 憲 次
"	芳林堂池袋店	ス	10	森 川 正 樹	"	有隣堂西口店	ニ	C 80	永 島 和 夫
"	新 栄 堂	ス	24	神 谷 満	"	神奈川大生協	ト	00-67	三 枝 博 之
練馬区	ブックセラーズ桜台	ト	77-19	田 口 富 朗	"	慶大生協日吉店	ス	19	志 村 均
武蔵野市	弘 栄 堂	ト	70-05	小 用 茂 夫	"	有隣堂伊勢佐木	ニ	C 81	原 田・江 河
"	紀伊国屋吉祥寺店	ニ	C 86	井 上 和 子	"	横浜市大生協	ト	00-63	藤 田 裕 造
三鷹市	第 九 書 房	ニ	A 74	渡 辺 明	"	横浜国大生協	ト	00-69	鈴 木 清 俊
府中市	啓 文 堂	ニ	C 76	津 野 由 宏	横須賀市	平 坂 書 房	ニ	B 33	遠 藤 くに江
国分寺市	三 成 堂	ト	79-63	釣 井 義 文	厚木市	有 隣 堂	ニ	C 81	桐 山 まり子
"	三石堂北口店	ニ	A 80	島 高 生	小田原市	八 小 堂 本 店	ト	48-58	加 藤 三 朗
国立市	増 田 書 店	ト	75-22	佐 藤 義 文	"	伊 勢 治 書 店	ト	48-51	小 川 国 雄
"	東 西 書 店	ト	70-04	栗 山 勝 広	藤 沢 市	西武ブックセンター	ト	48-55	東 信 彰

地 名	書 店 名	帖合	コード	担 当 者
藤 沢 市	有隣堂 藤 沢 店	ニ	C 78	川 北 直 治
平 塚 市	サクラ駅ビル店	ト	48—52	瀬 戸 千代子
松 戸 市	多 田 屋	ニ	A 24	小 林 めぐみ
〃	辰 生 堂	ニ	A 23	加 藤 修 一
市 川 市	弘 栄 堂	ト	82—50	宮 本 隆 司
船 橋 市	芳 林 堂	ト	55—80	雨 池 清 次
〃	三省堂西船橋店	ト	82—35	堀 和 夫
〃	西武ブックセンター	ニ	C 101	田 口 久美子
〃	弘 栄 堂	ニ	C 100	荒 川 洋 子
〃	旭 屋	ス	27	小 島 実 之
柏 市	プ ラ ザ 浅 野	ニ	C 100	佐 藤 泰 弘
千 葉 市	プ ラ ザ 多 田 屋	ニ	A 22	小 林 恭 子
〃	キディランド	ト	68—15	鈴 木 敏 勝
土 浦 市	共 栄 堂	ト	26—29	伊 藤 忠 夫
〃	白 石 書 店	ニ	A 34	坂 寄 勝 美
桜 村 市	丸善筑波大会館	ト	26—13	松 浦 正 成
〃	〃 第一群	ト	26—16	〃
古 河 市	か も じ や 書 店	ト	22—34	坂 入 善 次
水 戸 市	ツルヤ B.C.	ト	27—04	桜 岡 亮 一
〃	川又書店駅前店	ニ	C 100	木 村 賢 賢
宇都宮市	新 星 堂	ト	25—40	駒 馬 雅 彦
〃	落合パンパ店	ニ	A 40	大 野 幹 夫
〃	〃 オリオン店	ニ	A 40	落 合 均
栃 木 市	大 塚 書 店	ニ	A 38	岸 亨 司

地 名	書 店 名	帖合	コード	担 当 者
大 宮 市	新 栄 堂	ト	70—16	堀 江 克 夫
〃	押 田 謙 文 堂	ニ	A 31	細 田 寛
蕨 市	須 原 屋	ニ	A 30	蔵 本 雅 和
浦 和 市	〃	ト	70—18	(仕入)小泉修 (地階専門書)山北雅
所 沢 市	芳 林 ブ ッ ク ス	ニ	A 30	太 田 俊 一 郎
高 崎 市	天 華 堂	ト	27—50	山 村 裕 規
前 橋 市	煥 乎 堂	ニ	A 43	関 口 勝 正
〃	西武ブックセンター	ト	22—67	渡 辺 孝 博
〃	アルプス社	ト	22—53	坂 内 光 政
長 野 市	平 安 堂	ト	36—00	平 一 郎
〃	長 谷 川 書 店	ニ	B 43	阪 田 勇 一
〃	高 橋 書 店	ニ	B 44	内 山 昭 一
松 本 市	鶴 林 堂	ト	36—31	川 上 寛 彦
〃	遠 兵 堂	ニ	B 45	丸 山 則 彦
甲 府 市	柳 正 堂	ト	32—52	石 場 美 智 子
福 井 市	ひまわり書店	ニ	A 09	森 下 ひとみ
〃	勝 木 書 店	ト	31—23	大 塚 ひろみ
金 沢 市	福 音 館	ニ	A 08	源 弘 子
〃	北 国 書 林	ニ	A 08	中 川 尚 子
〃	〃 片町店	ニ	A 08	竹 沢 勝 栄
〃	う つ の み や	ト	11—00	瀬 嵐 秀 明
〃	金 沢 大 生 協	ス	33	元 秋 省 美
富 山 市	清 明 堂	ト	32—01	石 黒 明 美
〃	富 山 大 生 協	ニ	A 10	高 木 光 男

地 名	書 店 名	帖合	コード	担 当 者	地 名	書 店 名	帖合	コード	担 当 者
新 潟 市	紀伊國屋新潟店	ニ	C 77	小笠原行夫	名古屋市	三洋堂机中店	ニ	B 15	鈴木章
"	万松堂	ト	34-11	若杉照美	"	日本福祉大生協	ニ	35	高瀬秀樹
"	北光社	ト	34-04	市橋文昭	"	日進堂桜山店	ニ	B 15	加地謙一
沼津市	マルサン宝塚店	ト	43-03	土平純子	岐阜市	自由書房	ニ	B 16	塚本真博
静岡市	江崎書店	ト	9-16-2	松林千代美	"	大衆書房	ト	45-77	矢崎千代美
"	吉見書店	ト	9-16-2	堀井佐智子	四日市市	白揚	ニ	B 15	木村哲美
"	谷島屋	ニ	B 40	黒田弘	津市	別所11ビル店	ト	47-48	和田勝
清水市	戸田書店	也	E 62	大賀和子	大津市	西武ブックセンター	ニ	B 22	坂本登
浜松市	谷島屋	ニ	B 39	鈴木佳弘	彦根市	太田書店	ニ	B 22	吉田初美
"	谷島屋名店ビル	ト	44-15	田中真里子	大阪市	紀伊國屋梅田店	ト	9-1-2	宮本和彦
豊橋市	精文館	ニ	B 47	原田淑裕	"	旭屋本店	ニ	B 12	田中和博
"	西武ブックセンター	ト	85-25	杉山正直	"	"駅前店	阪	百	小林幸夫
"	新曙書房	ス	34	中村靖	"	青泉社	ニ	B 11	亀井洋二
刈谷市	愛知教育大生協	ト	9-15-15	竹内良江	"	トッパンセールス	ト	9-1-01	松村勇
名古屋市	三省堂名古屋店	ト	9-3-07	岡部裕章	"	ナンバブックセンター	ニ	B 11	説田隆良
"	星野書店近鉄店	ニ	B 15	鈴木収	"	旭屋ナンバ店	ト	9-2-9	川畑幸一
"	丸善名古屋店	ス	35	安藤正義	"	ユーゴー書店	阪	2	永岡義孝
"	日進堂上前津店	ニ	B 15	飯田博昭	"	旭屋アペノ店	ト	9-2-2	委(ひと)り
"	丸善ブックメイ	ニ	B 15	長江一憲	豊中市	阪大生協石橋	ト	9-5-01	足立・平野
"	正文館	ト	9-3-10	大久保俊彦	高槻市	コーベックス高槻店	ニ	B 11	白石・信博
"	ちくさ正文館	ト	9-3-10	木村直樹	吹田市	関西大生協	ト	9-5-01	石田信博
"	池下三洋堂	ニ	B 15	妥谷順子	東大阪市	ヒバリヤ本店	阪	3	白井孝昭
"	名古屋大生協南店	ト	9-5-03	後藤幹夫	"	栗林本店	阪	3	大井和昭
"	名古屋・ウニタ	ニ	B 15	竹内・林	京都市	アオキ書店	ニ	B 22	堀江幸雄

地名	書店名	帖合	コード	担当者	地名	書店名	帖合	コード	担当者
京都市	同志社大生協	ト	9-5-4	菅 令子	神戸市	神戸大生協学生会館	ト	9-5-06	海津昭博
"	立命大生協衣笠	ト	9-5-4	西村 孝	"	南天荘阪急六甲店	ニ	A 01	石崎良昭
"	リーブル京都本社	ニ	B 22	宮崎 佳明	西宮市	関西学院大生協	ト	9-5-0	大西和夫
"	聖文堂	ト	9-4-02	山本和明	姫路市	誠心書堂	ニ	A 03	稲垣 豊
"	オーム社	ニ	B 22	堀池 照実	"	新興書房	ニ	C 93	松井 弘年
"	丸善京都店	ニ	B 22	佐々木 信夫	洲本市	成 錦 堂	ニ	A 02	湊 中・繁夫
"	巖々堂京宝店	ト	9-4-04	山形 孜	鳥取市	富士書店本店	ト	56-22	田中・繁野
"	ミレー書房	阪	京都	岡田 美千雄	岡山市	細 謹 舎	ト	9-11-3	福原 孝
"	京都書院	ト	9-4-06	三宅 衛	"	丸 善	ニ	B 08	本岡 浜男
"	葵書房	都	B 22	中西 勝美	"	紀伊國屋岡山店	ニ	B 24	内田 益末
"	銀林堂	ト	9-4-01	中村 正	"	弘 栄 堂	ニ	B 24	川滝 幸弘
"	ナカニシヤ書店	ト	9-4-07	舌 優	"	岡山大学共済会	ニ	B 24	河原 清次
"	京都大生協	ト	9-5-4	北野 武司	広島市	広島積善館	ト	9-13-2	大橋 松枝
"	竜谷大生協	ト	9-5-4	石角 敏明	"	紀伊國屋広島店	ト	9-2-5	今居 健二
奈良市	南都書林	ニ	B 11	阪本 賢郎	"	平和書房	ニ	A 45	須藤 素平
和歌山市	宇治書店	ト	46-41	宇治 三郎	"	丸 善	ト	9-13-3	酒井 裕子
"	宮井平安堂	阪	5	今井 佳世子	広島市	金 正 堂	ト	9-13-6	山本 秀明
神戸市	海文堂	ト	9-6-05	早川 明	"	広文館本通店	ト	9-13-5	丸岡 義行
"	淳久堂	阪	百	田中 良二	米子市	今井書店本通店	ト	56-41	関本 雄一
"	日東館書林	ニ	A 01	金沢 弘	松江市	今井書店	ト	55-65	小山・古瀬
"	コーベックス	ニ	A 01	津田 英範	"	千鳥書房	ニ	A 44	山崎 比呂志
"	丸善神戸支店	ト	9-6-04	堰口 ひろみ	"	園 山 書店	ト	55-67	石輪 佳美
"	漢口堂三宮店	阪	神戸	安保 美己夫	"	" 大学前店	ト	55-72	園山 信雄
"	ユーカリ南天荘	ニ	A 01	橋本 正美	山口市	文 栄 堂	ト	57-03	志賀 久美子

地 名	書 店 名	帖合	コード	担 当 者
山 口 市	文栄堂大学前店	ト	57-10	中 島 和 子
高 松 市	宮 脇 書 店	ニ	A 49	宮 脇 安 治
徳 島 市	小山助学館本店	ト	61-35	武 田 弘 子
〃	森 住 書 店	ニ	A 48	岡 本 正 一
高 知 市	金 高 堂	ト	61-07	吉 村 教 子
〃	高 知 大 生 協	ト	9-15-16	西 岡 雅 行
松 山 市	紀伊國屋松山店	ニ	B 51	菊 地 伸 江
〃	愛 媛 大 生 協	ニ	B 51	井 芹 和 博
〃	丸 三 書 店	ト	59-36	川 上 緑
〃	明屋大街道店	ニ	A 50	檜 崎 均
北九州市	金 栄 堂	ト	9-8-02	斎 藤 盛 明
〃	ナ ガ リ 書 店	ト	9-8-02	中 村 久 子
〃	井筒屋八幡店	ニ	B 10	池 上 憲 司
〃	旭屋北九州店	ト	9-8-05	松 野 隆 次
福 岡 市	積 文 館	ニ	B 26	八 木 晃 三
〃	紀伊國屋福岡店	ト	9-2-7	井 上 詔 三
〃	金 文 堂	ト	A-1-1	坂 井・百 瀬
〃	りーぶる天神	ト	A-2-1	藤 原 文 夫
〃	九大生協法文系店	ト	9-5-7	平 川 晴 生
久留米市	ブックスたがみ	ト	63-43	古 賀 裕 敏
佐 賀 市	金 華 堂	ト	63-21	浪 瀬 一 助
長 崎 市	好 文 堂	ト	64-25	橋 本 かおる
〃	ステラ好文堂	ト	62-63	森 川 正 和
熊 本 市	三 章 文 庫	ス	38	阿 南 満 空

地 名	書 店 名	帖合	コード	担 当 者
熊 本 市	金 龍 堂	ト	62-66	野 主 和 憲
〃	ま る ぶ ん	ト	64-47	東 義 則
〃	紀伊國屋熊本店	ト	9-2-6	藤 野 登喜博
〃	長 崎 書 店	ト	64-45	長 崎 文 子
大 分 市	明 屋	ニ	A 53	平 山 興 治
〃	本 町 晃 星 堂	ト	67-80	清 水 誠一郎
鹿児島市	鹿 児 島 大 生 協	ス	38	竹 井 昌 弘
〃	春苑堂プラザ店	ト	65-45	永 友 公 子
〃	旭 屋	ニ	B 09	竹 下 文 明
〃	坂 口 金 海 堂	ト	65-41	飯 田 義 人
沖 縄	球 陽 堂 ビ ル	ト	50-13	森 屋 美智子
〃	朝野書房大学前店	ニ	A 55	玉 城 紀 浩

【お願い】 人文書担当者の変更がありましたら、ご面倒でも人文会までご連絡下さい。

学校に教育を とりもどすために

林 竹二 ●重版出来

尼工でおこったこと 教育の本義に
立ちかえりつつ、荒廃した教育の地
平を切り拓くドキュメント。1500円

森有正

—感覚のめざすもの

辻 邦生 ●重版出来

西欧と日本のはざまを生きた森有正
氏の生涯の軌跡をあつづける。1400円

芥川龍之介の宿命

芹沢俊介

その生涯を通して鳴り響く不安の声
はどこからやってくるのか。1600円

筑摩書房

〒101東京神田小川町2-8

春秋選書

■中村尚司著

地域と共同体

共同体再生の理論と展望

一三〇〇円

■高尾利数著

聖書を読み直すI・II

各三〇〇円

■金岡照光著

仏教漢文の読み方

一〇〇〇円

■玉城康四郎著

冥想と経験

一〇〇〇円

■玉城康四郎著

宗教と人生

一〇〇〇円

東京・千代田区
外神田2-18-6

春秋社

☎(03)255-9611
振 東京8-24861

ジャン コクトー全集

全八巻

(内容見本送呈)

第3回配本発売ノ

第五巻評論Ⅱ

定価六五〇〇円

A5判箱入
平均六〇〇頁
既刊2冊
各六五〇〇円

東京創元社

162 東京都新宿区新小川町

A・フランシス ジャズの世界

—その歴史と美学とテクニック

前野

律訳 三二六頁 一六〇〇円

誕生以来70余年、ジャズは音楽に新しい要素
をもたらした。ジャズのもつ多彩な世界を、
フランス人の著者が独自の観点から語る。

油井正一著

ジャズの
歴史

一五〇〇円

ミュージック・ライブラリー

B6判カバー装 既刊14冊

誠信書房

東京都文京区大塚3-20-6

ロロ・メイ著作集 ㊦

創造への勇氣

小野泰博訳 文学、芸術を祖上にのぼし、創造の苦
惱、詩の誕生の秘密、恐怖と創造性の葛藤などを探
り、創造こそわが人間の最高位でかつ最も健全な行
動であることを謳った創造精神賛歌の書。一八〇〇円

1 失われし

自我をもとめて

一八〇〇円

2 愛と意志

二〇〇〇円

3 わが内なる暴力

二五〇〇円

東京大学教養講座

① 無限と有限

竹内 啓編 あらゆる面で人間生活に影響を与えている宇宙観の根本問題である「無限と有限」について各学問分野から様々に考察する。 定価一八〇〇円

② 学問における価値と目的

竹内 啓編 今日、科学や学問の有用性のみならずその弊害も問題とされている。その観点から、学問の目的とは何かについて広く考察する。 定価一八〇〇円

③ 時間と人間

村上陽一郎編 本書は、「時間」の問題が今日の学問分野のなかでどのような姿を現わしているか、その状況を的確に捉えようとする。 定価一八〇〇円

東京大学出版会

113 東京都文京区本郷東大構内 振替東京6-59964

J・ピアジェ著／波多野完治他訳 現代心理学・認知理論の展開

心理学が今まで歩んできた道筋を追い、現代心理学の立つ位置を明快に指し示したピアジェの積年の研究のすぐれた要約。 四六判／定価一、二〇〇円

J・ピアジェ著／芳賀純他訳

現代科学論・人間科学と学際的研究

拡散し専門化を辿る科学の発展にとって学際化とは何か。この大きな課題にピアジェが挑み、緻密な論理を展開する。 四六判／定価一、二〇〇円

福村出版

東京・文京小石川1-3

電話東京813-3981

日本評論社

靴をはいた巨大児

私の取材ノート

鎌田 慧著

四六判／一五〇〇円

跋扈する近代化神話。それはあたかもランボーがいう「進歩」という靴をはいた巨大児」のごとく時代をふみしだいていく。高度成長から長期不況へと大きく揺れ動いた七〇年代の有様を、そこに底通する思想を、そして人びとの労働と生活を、著者の取材ノートから再現する。

東京都新宿区須賀町／振替東京0=16

平凡社

〒102 東京都千代田区四番町4
振替・東京8-29639

平凡社選書 第69巻

山の民・川の民

——日本中世の生活と信仰——

井上鋭夫著 解説 石井進 編 解題 田中圭一 定価一、六〇〇円

中世において、山の尾根や川は交通・運輸の手段として、国郡や荘園・公領の境界であった。そこは修験者や金堀り、筏流し、紺掻などの生活の場であり、境界は彼らの信仰に支えられていた。現代に残された遺跡・遺物・景観・地名・絵図・伝承などを手掛かりに、現地調査に基づいて、社会経済史と宗教史を統合し、中世の世界を復元する意欲的試み。「一向一揆の研究」で知られる著者の遺稿集に、今後の研究を展望する解説70枚を付す。

法政大学出版局

服部幸雄

定価三八〇〇円

江戸歌舞伎論

江戸時代二五〇年間に形成された歌舞伎の構造を、都市民衆の実生活と生活意識の推移・変遷のなかに捉えなおし、その作者・演技者、観客のそれぞれの成立背景を、庶民信仰、浮世絵、舞踊、文学、俳諧等々にわたる江戸文化への多角的考察を通して浮き彫りにする。

東京都港区南麻布2-8 / 振替東京6-95814

西谷能雄著

〈好評増刷〉四六判並製カバー・二五六頁・定価二〇〇円

出版界の虚像と実像

本書は、読者の活字ばなれ、大と小への両極分解等の今日の出版界の状況をふまえて、ところどころの業としての出版のあり様を率直に提言する。

西谷能雄著

出版のこころ

四六判・定価一五〇〇円

カミーズ著
加藤恭子訳

編集者とは何か

四六判・定価二〇〇〇円

東京豊島駒込1の3の15
振替(東京)七・八七三八五
電話 943・6841

未来社

アインシュタインの宇宙

コールダー 相対性理論の基本的内容を平明に解説し、宇宙論の興味深い話題を眺望する。小林稔・小林謙三訳 三〇〇円

心理学的医学

ジャネ アカデミズムとは別の地平に芽生えた奇蹟、催眠に治療の原動力を探る精神療法の原典。松本雅彦訳 三〇〇円

戦後思想の模索

森有正、加藤周一を読む
海老坂武 森有正と加藤周一の著作への鮮烈な読書体験をとおして、生き生きと現われる著者の自己形成の記録。二五〇円

新比較神話学

リトルトン 発展の著しい神話学・人類学を、新進の米神話学者がデュメジルの業績に即して紹介。堀美佐子訳 二六〇円

紅茶を受皿で

《イギリス民衆芸術叢書》小野二郎 料理やワイン、食器、壁紙、ちらし、絵本、石、樹木など、「もの」の触感を手がかりに、イギリス民衆の生活芸術を鮮やかに掘り起す。2300円

民衆のいる音楽

《太鼓と合唱》江波戸昭 ヨーデルやカンツォーネ、リュートやバグパイプなど、歌と楽器の発生と伝播を辿って、ヨーロッパ、アフリカ、中近東を歩く音楽の世界地図。2300円

シェイクスピア最後の夢

フランセス・イエイツ 藤田実訳 最晩年の三つの劇——「シンペリン」「あらし」「ヘンリー八世」の孕む謎に迫り、この最後のルネッサンス人の夢と希望を読み解く。1800円

晶文社 東京都千代田区外神田2-1-12
電話 (255) 4501

東京文京本郷
3丁目17-15

みすず書房

大月フォーラムブックス

① マイホーム・ゲーム

——生存権としての住宅論

本間義人著

46判/1300円

② グラムシへの旅

——現代イタリア紀行

島田豊著

46判/1300円

③ 誰のための銀行

●国民のための銀行像を探る

及川和男/平田貞治郎著

46判/1300円

④ 涙より美しいもの

——大津方式にみる障害児の発達

稲沢潤子著

46判/1200円

⑤ 緑の作戦

——ヨーロッパと日本

高橋理喜男著

4月未刊行 46判/1300円

東京文京本郷2-11 **大月書店** 電話 03 (813) 4651

遺跡・遺物と古代史学

岸 俊男著

四六判/二六四頁
定価 一、六〇〇円

稲荷山鉄剣銘、太安万侶集、あるいは鳴宮、松林苑など、最近発見された重要な遺物・遺跡に対して、歴史学の立場からその歴史的意義を説明するとともに、これからの新しい古代史学の進むべき方向を示唆した短篇集。

地租改正と資本主義論争

田村貞雄著

四六判/三二〇頁
定価 二、六〇〇円

地租改正研究は、戦前におけるマルクス主義者間の論争のなから派生し、発展してきた。本書は戦前の戦略論争、日本資本主義論争に立ち戻って、あらためて地租改正の歴史的評價を問ひ直すものである。

吉川弘文館

113・東京都文京区本郷7-2-8/電話03-813-9151

時間について

定価 2,800円

P.J.ズワルト/井上健、南政次訳 時間とは何か。時間は実在するか。時間に方向はあるか。時間をめぐるとさまざまな哲学的問題に現代的地平より答える。

対話の論理・弁証法再考

定価 1,800円

N.レッシュャー/内田種臣訳 弁証法とはどんな論理か？ 合理的であるのか？ 科学的アプローチと両立するか？ イデオロギーから自由になれるのか？

ハイデガーとの対決

定価 4,600円

K.ヤスバース/渡辺二郎、他訳 ハイデガーの思想と行動についてのヤスバースの克明な分析ノートであり、現代哲学史の貴重なドキュメントでもある。

紀伊國屋書店

東京都新宿区新宿 3 (354) 0131

爛熟のなかの危機

川崎嘉元著

46判カバー装 定価 一四〇〇円

「イギリス社会の内側から」はたして「神話の崩壊」なのか——資本主義、市民社会の母国といわれ、民主主義、地方自治、労働運動の栄光ある伝統の国とみなされてきたイギリス社会の内実とそのゆくえをさぐったユニークな体験的レポート。その「危機」が暗示するものはなにか？ 日本の将来を考えるうえでの必読書！

東京神田 **青木書店** 神保町 I

非売品

昭和56年4月30日発行 年4回発行 第30号

発行所 人文会 みすず書房内

〒113 東京都文京区本郷 5-32-21

(113-91 東京都文京区 本郷局私街89号)

回覧者印	回覧者印	回覧者印	回覧者印	回覧者印